

マガキシングルシードの改良について

長崎県総合水産試験場 種苗量産技術開発センター 介藻類科

はじめに

長崎県のマガキ養殖は増加傾向にあり、平成21年の生産量は1,497t、生産額は5億8千万円に達しています。増産に伴い、佐世保市の「九十九島かき」や、諫早市小長井町の「小長井牡蠣」などが商標登録を取得する等、県内各地で販売の拡大に向けた取り組みがさかんに行われています。

長崎県で行われているマガキ養殖は、前年の秋にホタテ貝の殻に稚貝がついた種板を購入し、翌年の初夏に本養殖用のロープに付けて海中に垂下する方法が主体です。

一方で、下側の殻のふくらみが強く、形の良いマガキを生産する方法として、以前にシングルシードというマガキの稚貝を利用する養殖方法をご紹介しました(平成21年5月号)。シングルシードとは一粒種の意味で、一個ずつばらばらになるようにマガキの稚貝を作ります。長崎県総合水産試験場では稚貝の飼育方法に工夫を加え、人間が扱いやすいシングルシードを生産する方法を開発し、量産化の実験を続けてきました。また、夏に強いマガキ種苗の開発にも併せて取り組んでおりますので、概要を紹介します。

シングルシードの量産技術

マガキ稚貝は、殻の大きさが1円玉大になると取り扱いが容易になるので、シングルシードを生産する場合はプラスチック板

に稚貝を付着させて飼育し、大きくなったところで稚貝をはがして集めます。プラスチック板は稚貝をはがすのが容易なので一粒ずつの種苗が簡単に作れますが、稚貝が好んで付かない事が課題でした。そこで、プラスチック板にマガキの稚貝を誘引する効果のある親カキの殻を砕いて貼り付けることで問題を改善しました。この方法では、従来の20倍の種苗が付着します。(図1)

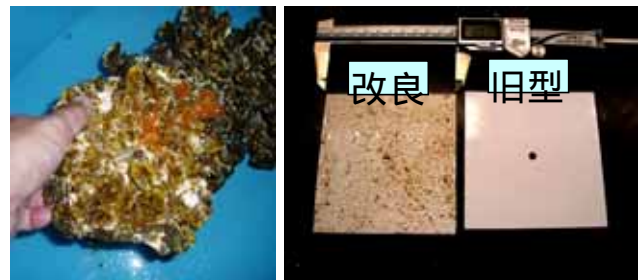


図1 改良ノクターと従来のノクターの比較(右) 改良ノクターへの採苗状況(左)

その結果、平成22年度からは天然・人工採苗いずれも10万個レベルの生産を安定して行えるようになりました(図2)。今年度からは佐世保市水産センターでもこの技術をイワガキの生産に利用しています。

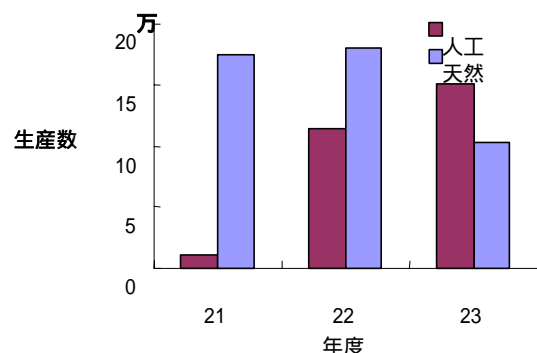


図2 シングルシード種苗生産数

夏に強いマガキ種苗の検討

マガキは、東北地方などの冷たい海ではほとんど死にませんが、西日本では夏から秋にかけて大量へい死することがあります。本県でも諫早湾などで数年おきに大量へい死が発生して大きな問題となっています。そこで平成十九年の大量斃死で生き残ったマガキを親貝に使って、夏に強いマガキ種苗の開発を始めました。ただ、種苗の選抜だけではすぐには強くならないので、産卵期をコントロールして死ににくく、できるだけ大きくなる時期を探しました。その結果、四月頃生まれた選抜種苗は、通常の養殖マガキよりも生き残りが良くなる可能性があることが判り、現在も実験を続けています。

より高く売れるマガキ養殖に向けて

平成二十二年度に生産試験を行ったシングルシードマガキは小長井町漁協を通じて試験販売を行いました。その結果、九センチサイズのもので一個百円で東京のオイスターバーに引き取られ、千九百個を出荷しました。（図3）この価格は通常の養殖マガキの約四割増しにあたります。この結果を受けて同漁協には今年度生産種苗六万五千個を委託して養殖試験を実施中です。



図3 出荷用シングルシード

また、地元産の天然種苗の利用についても現在検討を続けています。地元産種苗は、特に夏に強いわけではなく、宮城産に比較すると小粒ですが、地元の方のお話では味も違うとのことでしたので、純本県産として特徴を活かす可能性があると考えています。

おわりに

本県のシングルシードは、ようやく市場で評価してもらえるところまで来ましたが、これから生産コストや販路などで厳しい競争を乗り越えなければなりません。そのためには効率的な生産方法だけでなく、より高品質な製品の生産方法も検討する必要があります。総合水産試験場では、今後も漁業者の皆さんの経営の安定化をお手伝いできる技術開発に努めて参りたいと考えています。

（担当 大橋智志）